

3

台湾の男性同性愛者による BL 漫画の批判的受容

周典芳

はじめに

BL (Boys' Love、ボーイズラブ) とは、男性同性愛をテーマとした女性向けの漫画や小説などを指す用語である。1970年代の、日本の女性漫画家、萩尾望都や竹宮恵子らによる少年愛物語に始まり、近年、「ヤオイ」と「BL」の名の下で広がってきたが、台湾で初めて注目を浴びたのは、1990年代初頭である。当時、島村春奈による「聖闘士星矢」のパロディ漫画「聖闘士ダ星矢」が『星矢小劇場』と題して翻訳出版された¹。

1992年、台湾における著作権の改正により、日本漫画が海賊版ではなく、正式に陳列販売されるようになる。それによって、漫画市場も激しい競争時代に突入していく。発行部数は1980年初期の月50万冊から、1992年の月350万冊に増加し、営業額の総成長率はほぼ200%となった(黄志湧1996)。そして漫画市場の繁栄につれて、漫画を愛読する人もますます増加し、さまざまな作品が次々に日本から台湾へ輸入されてきた。日本のBL漫画もその中に含まれていた。1993年に、冬水社の「吉祥寺企画」

1 『聯合報』(1990年8月27日)。「漫畫變調篇、龍兄虎弟不一樣、英雄變狗熊、美女變同性戀・漫畫變調篇越變越紅」の新聞記事による。

という BL 漫画シリーズは台湾でも発売され、煽情的ではなく、さわやかな描写がゆえに受容しやすい読み物として台湾における BL 文化の土台となった²。2001 年に角川書店が台湾に支社（台湾国際角川書店）を作り、日本のヤオイ漫画も輸出しはじめる。2003 年に、台湾角川が日本角川の BL 系「ルビー文庫」を台湾に持ち込み、「BL」という名が台湾で話題になった³。2006 年に BL 漫画作家の中川春菊が台湾のコミックマーケットでサイン会を開く時に、読者たちが 24 時間も行列をつくって待っていたことから、台湾での BL の人気が窺える⁴。当時、「腐女子」という用語も台湾に登場した。BL を楽しむ女性は自他とも「腐女」と称する。用語の書き方に多少違いがあるが、使い方や意味は、基本的に日本から移植されたといえよう。2007 年になると、BL という漫画ジャンルは、ますますヒットし、同年の「台北国際書籍展覧会」で台湾の BL 漫画作家や同人誌作家、編集者が集まり、「腐女子書房」という座談会を開いた。実はすでに台湾だけではなく、中国にも BL ブームが蔓延していた⁵。日本においては「ヤオイ」を BL の総称とする傾向があるが、「ヤオイ」は元々「山なし、落ちなし、意味なし」の頭の 3 文字によって、出来上がった用語である（中島 1991; 藤本 1998; 水間 2005; 永久保 2005; Bauwens 2006）。この用語を中国語の漢字で表現するのはまず無理であり、意味で訳すのも難しい。ゆえに、台湾では「BL」と呼ぶのが普通である。したがって、本章では「BL」を使って論じることとする。

広義の BL は、「作品」と、その「創作行為」及び「読書行為」を含んでいる。BL を探求するに当たって、この三つの側面から入り込むことが必要だと思われる。しかし、BL 漫画がますます一般化してきている現在、

2 『聯合報』(1996 年 6 月 15 日)。「美得絶對、浪漫加分、同志漫畫勾引少女的心」の新聞記事による。

3 台湾角川 (2013)。「關於角川」、<https://www.kadokawa.com.tw/p10-1profile.php> (最終確認 2013 年 12 月 21 日)

4 『聯合報』(2006 年 8 月 12 日)。「18 限 BL 系熱賣 書商檢查漫迷年齡」の新聞記事による。

5 『聯合報』(2008 年 4 月 7 日)。「帥哥折磨帥哥好看、她哈男男愛、腐女廣州蔓延」の新聞記事による。

社会からどのようにみられているのかも、切り口の一つだと考えて良いだろう。2013年に、台湾で同性婚や伴侶権に関する民法改正案が審議され、熱く議論された。BLとは同性愛者のイメージを借りながら、虚構のラブ・ストーリーと性描写を楽しむものであるが、台湾での研究によると、BL漫画と同性愛に対する意識は密接に絡み合っており、同性愛差別の解消や同性愛の権利擁護と繋がるとされている（鐘瑞蘋 1999; 蕭湘文 2000; 陳淑惠 2007; 周 2010）。そこで、同性愛者はどのようにBL漫画を見るのだろうかという問題を提起し、台湾の男性同性愛者とBL漫画との関係を解明することが、本章の目的である。

先行研究

前述したように、BLは男性同性愛者のイメージを借りて、虚構のラブ・ストーリーと性描写を楽しむ行為であるといえよう。つまり、BLは本物の同性愛とは関係がなく、現実非関与なメディアのメタ消費である（上野 2007: 35）。このように同性愛者をファンタジーの対象とし、彼らの性を商品化している点がしばしば批判される。たとえば、石田はそれを「表象の横奪（the appropriation of representations）」と呼ぶ（石田 2007b: 116）。そもそもすべての創作は捏造、現実からの離脱であり、何かから横奪することとか、表現の貸借によって成り立つと言える（石田 2007b: 117）。また、女子をメインターゲットにした「男と男の（恋愛）ファンタジー」には、その表象を主に「他者」として扱われ消費されているゲイへの「ある種のイメージの押し付け」があり、それは暴力的ともいえるのではないかと、いう問題がある（ヤマダ 2007）。したがって、BLを通して読者に伝わる同性愛者のイメージは、決して写実的ではないことは言うまでもないだろう。

日本の腐女子はBL漫画を愛読していても、必ずしも現実の同性愛に興味を持つとはいえない（石田 2007a）が、同性愛者のイメージは、BLの受容と深い関係にあることは台湾の研究者によって明示されてきた。それに関わる研究調査の結果によると、BLに接触する量と同性愛者に対する受容態度には相関が見られる（鐘瑞蘋 1999; 蕭湘文 2000; 陳淑惠 2007; 周

2010)。BL 読者には同性愛者を支持する傾向がありながら、一方、彼女らのセクシュアル・アイデンティティには同性愛の傾向が見えない（蕭湘文 2000）。BL 漫画をよく読む読者に同性愛への志向性は見えないのだが、読者がリアルな同性愛者をより受け入れる立場が見えるのである（鐘瑞蘋 1999; 蕭湘文 2000）。台湾で 400 人の大学生を対象に行われた調査でも、同性愛者に関する書籍や映画を見たことのある人は、全体的に同性愛者をより受け入れる傾向が見られた（柳俊羽 2007）。高校生を対象とした BL との接触と同性愛者に対する意識の関連性についての調査結果でも、BL 漫画の読書行動と、同性愛者に対する見方には深い関わりがあった（陳淑惠 2007）。

BL 読者の男性同性愛者に対する意識は、BL に描かれるキャラクターの禁忌的関係性と関わる実証的調査結果でわかった。少年愛が世間一般から拒絶される愛であるからこそ、異性愛の安直さを廃して、究極のつながりとは何かという純粋な関係性のみを問題にし得たのである（藤本 1998: 145-146）。BL とは妄想世界における「絶愛」を求める同性愛に触れ、感動することである。この感動によって生じた同性愛者に対する同情は同性愛差別の解消や権利擁護へと繋がっている（周 2010）。

研究方法

本章の目的は、台湾の男性同性愛者による日本の BL 漫画に対する受容と批判を探求することにある。永久保（2005）は BL 小説を分析し、その中に「ロマンチック・ラブ・ストーリー」としての顔や「エロ小説」としての顔があると述べている。したがって、本章はまず男性同性愛者が、BL 漫画における「愛情」と「性表現」に対してどのような感想を持っているかを聞きだす。また、BL は、同性愛者のイメージを借りて、虚構のキャラクターのカップリングを作り上げて楽しむテキストでもある。「カップリング」は、BL の萌えの本質で、キャラクターの「関係性」を表す（斎藤・酒井 2006）が、この関係性は、不可分一対のものである主導性を握る「攻め」と受動的な「受け」からなる（ながくぼ 2007: 142）。そこで、本章では、男性同性愛者が BL 漫画の描く「攻め」と「受け」の関係性について

意見を尋ねる。最後に、台湾のBL読者は同性愛に対して寛容な態度を示す傾向がある（鐘瑞蘋 1999; 蕭湘文 2000; 陳淑惠 2007; 周 2010）ことから、BL読者の同性愛権利擁護の立場についての見解も明らかにする。

代表性と知名度から選ぶと、日本と台湾共に人気のあるBL漫画は『純情ロマンチカ』であろう。『純情ロマンチカ』は日本の漫画家中川春菊による作品で、角川書店から刊行されたBL漫画である。台湾では、角川書店の傘下にある台湾角川によって出版され、大ヒットとなった。例えば、中川春菊が台湾のコミックマーケットで開いた先述のサイン会に、彼女とその作品の台湾での人気ぶりが見えた⁶。

少女漫画は、独白や回想といった内面の言葉を重視し、あるときはそれだけが長々と続き、またあるときはセリフと同時進行で内面と外の世界とのズレが強調される（夏目 1997: 166）。漫画作品を調査の対象者（男性同性愛者）に送って読んでもらうという方法もあるが、BLは少女漫画のジャンルに属しているので、男性である対象者が内面の言葉が長く続くBL漫画を読み続けられるかという恐れがあった。2008年4月から『純情ロマンチカ』が日本でテレビアニメとして、放送され⁷、2009年にこのテレビアニメが2話収録の全6巻DVDとして販売された⁸。台湾では博英社によって、2010年に中国語字幕付きのDVDが販売されている⁹。本章では2010年に発売された『純情ロマンチカ』全6巻合計12話のDVDを素材に使い、台湾の男性同性愛者に日本BL漫画が描き出した男性同性愛者の「愛情」、「性表現」、「関係性」と「BL読者の同性愛権利擁護の立場」、計4つの項目についての意見や感想をまとめる。

6 『蘋果日報』(2006年8月11日)。「BL人気漫画家中川春菊獨家專訪」の新聞記事による。

7 中川春菊・角川書店(2008)。「TVアニメーション『純情ロマンチカ』公式サイト：純情ロマンチカ(第1期)」。<http://www.suzukisan.info/tv.html#01> (最終確認 2013年12月21日)

8 中川春菊・角川書店(2008)。「TVアニメーション『純情ロマンチカ』公式サイト：DVD」。<http://www.suzukisan.info/dvd.html> (最終確認 2013年12月21日)

9 My Cartoon 動畫網(2013)。純情羅曼史[01]DVD。http://www.my-cartoon.com.tw/index.php?page=shop.product_details&flypage=shop.flypage&product_id=1252&category_id=1171&manufacturer_id=0&option=com_virtuemart&Itemid=164 (最終確認 2013年12月21日)

そもそも性的指向は、極めてプライベートなことである。セクシュアリティにおいて、マイノリティの立場でもある同性愛者は、公表しないのが普通であろう。さらに、同性愛者を集め、BLを読ませて、一対一でインタビューするのも、容易なことではない。このような理由により、スノーボールサンプリング (snowball sampling) の方法で調査に応じた人に、他の対象者を紹介してもらい、台湾で22名の男性同性愛者を対象者として集めた。これらの対象者の年齢の幅は16歳から24歳までで、住まいは台湾全国に及んでいるが、全て学生である。これは恐らくスノーボールサンプリングの方法で選んだ対象者達にとって同質的な人が集めやすかったためであり、社会人はより警戒心が強く、簡単に他人にプライベートなことを披歴しないからかもしれない。また、住まいが台湾全国であったのは、恐らくソーシャルメディアを通して、知り合った友達だからだと判断する。

対象者には先述した『純情ロマンチカ』の6巻の中の1巻、1枚のDVDを送った。内容は48分の長さで、2話のストーリーが含まれている。調査データは、対象者に作品に現れた男性同性愛者の「愛情」と「性表現」、「関係性」、加えて「BL読者の同性愛権利擁護の立場」に対する意見や感想をシートに記入してもらった上、郵送やメールで回収した。謝礼として、対象者1人に500台湾元（およそ1700日本円）の郵便為替を送った。調査期間は2011年8月から12月までの約4ヶ月間であった。22名の調査対象者は以下のように数字の01から22までを用いて表す。

研究結果

22名の男性同性愛者に、日本BL漫画『純情ロマンチカ』のDVDを見せて、感想や意見を述べてもらったところ、まず、キャラクターの「愛情」について、以下のような意見が集まった。

このBLストーリーは、同性愛者が憧れている生活を見せてくれたが、ドラマチックすぎると思う。(05)

ドラマチックすぎる、まるで夢みたい。少女漫画らしくて、同性愛者向け

ではなさそう、乙女チックなところが多すぎるが、面白かった。(19)

事例05と19の意見のように、同性愛者の目からみたBLは、「ドラマチックすぎる」、「夢みたい」である。「同性愛者向けではなさそう」と思いながらも、「面白かった」と感じる。

BLの漫画やアニメがとても好きだ。なぜかという、ハッピーエンディングがあるから。現実の世界で、同性愛者の愛が実るのは、極めて少ない。世間の目、家族の理解、などの問題がある。確かにBLと現実の間に、落差がある。しかし、たまにBLを見るのは、自分の励ましになると思う。(06)

多くの対象者は、BLに好感を抱いている。それは事例06に示されたように、「ハッピーエンディングがあるから」かもしれない。1973年に、アメリカ精神医学会が『精神障害の診断と統計の手引き』(DSM-II)から同性愛の項目を除外した。その後、同性愛に対する項目は四半世紀に渡って修正がなされ、同性愛は精神的疾患や偏差行為などではなく、精神医学の面においても、決して異常な行為ではないことが認められた。しかし、長い間セクシュアル・マイノリティとして、世間やメディアから奇異の目を向けられるのも、事実であった。事例06のように「愛が実るのは、極めて少ない」や「世間と家族の理解」に悩まされる男性同性愛者は、多くいると思われる。ゆえに、『純情ロマンチカ』に映された男性同性愛者の愛情は「落差がある」にもかかわらず、「自分の励ましになる」という声が聞こえる。

アニメに呈示した社会環境は、同性愛者にとってもやさしい。男同士が告白し合うのは許されるし、相手の反感を考えなくても大丈夫。付き合っている時に、堂々と町中を散歩し、抱きしめ合ったり、キッスしたりし、全てが許されている。台湾はアジアの中で、同性愛者にやさしい国だと思うが、やはり公の場では、男同士のスキンシップが変に見られる。(10)

対象者 10 の感想によると、『純情ロマンチカ』に表現された男性同性愛者の愛情は、カップル中心で、よそ者や世間の目が邪魔にならない。そのため、同性愛者の目から見れば、BL の世界は「同性愛者にとってもやさしい」が、伝統的な文化においては同性愛者はやはり排除される性である。

中華圏においては、男は跡取りであると期待されるので、家族にゲイだと知られると、大変なこととなる。だからほとんどの同性愛者は家族にばれないように、こっそり恋人を作る。(09)

中華圏は文化として、「苗字」に対する拘りが強いといえる。台湾の民法が 2007 年に改正される前までは、子が父の氏を継承するのが原則であった。台湾では、やはり男子の方が「家」に対する意識が強い（陳其南 1990）。したがって、確かに台湾では新生児の性別がかなり不均等である（行政院主計處 2010）。そもそもホモフォビアを男性が抱く時、そこには固定的な「男らしさ」の意識が控えている（伊藤 2008）。普通、台湾では男の子は特別に扱われ、期待される。対象者 09 の感想によると、『純情ロマンチカ』にはこれらの家族への責任や期待に反しているというプレッシャーが見えないとある。確かに日本と台湾の間に文化の差はあるが、子が父の氏を継承する習慣は似ているといえよう。

まとめてみると、『純情ロマンチカ』の DVD に現れた「愛情」に対して、台湾の男性同性愛者は、内容的に「ロマンチックすぎる」と思うが、このような内容に「同性愛者にやさしい憧れの恋愛環境」、「現実と落差があっても、励ましになる」、家族からのプレッシャーが全然見えないなどの感想をもっていることが窺える。

次に、『純情ロマンチカ』における「性表現」について、対象者の意見を以下のようにまとめる。

『純情ロマンチカ』の中の性は、やはり現実と違う。私が知っている限り、男性同性愛者は、そこまでロマンチックではない。多くはセックスだけの関係である。(06)

僕にとって、セックスは同性愛としてのアイデンティティを確信するポイントでもある。確かに『純情ロマンチカ』のセックスはBL読者の注目を集めると思うが、本当の男性同性愛者のとはかなり違う。現実の男性同性愛者のセックスは女性に不安を起こさせたり、男性に反感を持たせたりするかもしれない。(17)

野火(2007: 89)によると、BLにおける男同士の設定は、女性がセックスの現場で犯される側として感じるリスクや不公平感、また自分が被害者であるという意識を忘れさせる。BLの中の性表現は、読者が自分を「見られる性」から「見る性」へと逆転させ、男性に対する欲望を語れる位置に自らを移動させている。したがって、女性にとって親しみやすい性表現であるともいえる(金田 2007: 177)。ともあれ、BLは女性向けのものである。藤本(1998)も指摘しているように、少年愛のカップルが常に究極の対をなす。つまり、BLの性表現は女性の理想的なもので、常に一对一のものである。しかし、現実の男性同性愛者は、女性の理想に沿う必要がない。事例のように、「多くはセックスだけの関係で」(06)あり、「女性に不安を起こさせる」(17)。これは男性同性愛者の性の真実かもしれないが、BLは実際にヘテロ的なテキスト(永久保 2005: 323)である。しかし、それが故にヘテロ的な基準で男性同性愛者の性を見るべきなのだろうか。これはより深い議論を要するのである。

BLでの「攻め」と「受け」の間における格差は、それらのキャラクター像の魅力を成り立たせ(ながくぼ 2007: 142)、ヒーロー役とヒロイン役を差異化するための識別要素として機能している(永久保 2005)。今回の調査で集めた資料をみると、台湾の男性同性愛者は、以下のようにBLでの「攻め」と「受け」についての意見を寄せている。

「攻め」と「受け」がアニメほどはっきりと決められているわけではなく、むしろお互いに補い合うのだ。支配と被支配の関係は固まっているわけではない。人によって、場合によって、環境によって、変わっていく。(12)

上記の事例 12 によると、男性同性愛の関係には「受け」と「攻め」のようなはっきりとした役割がなく、「支配と被支配の関係は固まっているわけではない」、「変わっていく」のが普通であるようだ。

最後に、「BL 読者の同性愛の権利擁護の立場」について、同性愛者の意見を以下のようにまとめる。

昔「同性愛＝エイズ」というイメージが強かった。本当に不公平だ。全ての同性愛者はセックス目当てであるわけではなく、みんな自分の愛のために頑張っている。同性愛者にとって、同性婚が法律に認めてもらえないのは、衝撃である。BL 読者が同性婚に賛成するのは、本当に支えと励ましになる。(02)

台湾において、同性愛者を最も傷つける言葉の暴力は、彼らの家族による「同性愛＝エイズ感染者」という誤解である（王貴正 2007）。今回の対象者も、似ているような体験があるかもしれない。それを「本当に不公平だ」と感じる対象者 02 は、BL 読者が「支えと励ましになる」と感じる。

かつて、結婚というものは異性愛者しかできないと思っていた。その時、自分は結婚できないから、一生孤独であるだろうと思い込んだ。海外では同性婚ができると聞いてから、いまのように台湾でも話題となって、議論されるようになった。われわれの立場を理解しようとする腐女子たちに、感謝します。(07)

長い間セクシュアル・マイノリティとして、世間に奇異の目を向けられる立場から見れば、BL は男性同性愛者に一番フレンドリーなテキストの一つだといえる。だからこそ、対象者 07 のように「腐女子たちに、感謝します」という気持ちを抱く。しかし、BL に表現された同性愛者像は、虚構で現実と関係ないものである。BL の内容は同性愛者と関係がないのに、BL 読者は同性愛の権利を擁護するとされる。この見解について、男性同性愛者はどう思うのだろうか。今回の調査では以下のような声が寄せられた。

BLは現実と違いすぎる。同性愛者に対する誤解を招くかもしれない。しかし、他のロマンス小説や少女漫画も同じく現実離れしているじゃない？もしBLを通じて、同性愛者に対する理解や受け入れに役に立てば、別にいいじゃないか。(14)

たしかにBLは同性愛のイメージを狭く固定したが、腐女子が同性愛者を理解するチャンスにもなった。批判する必要がないと思う。しかし、やはり、より現実の同性愛者に近づいてほしい。同性愛者もいろいろいるから、これを理解してもらえると、世界はよりよくなると思う。(17)

対象者14は、「同性愛者に対する理解や受け入れに役に立てば、別にいいじゃない」という意見を述べた。これは恐らくセクシュアル・マイノリティとして疎外されたゆえに、BLは同性愛者のイメージを正しく表現しなく、「同性愛のイメージを狭く固定した」恐れがあるにも拘わらず、対象者17と同様に、「批判する必要がない」という意見をあげた。

普通BLが好きな腐女子は、同性愛者にフレンドリーで、彼女たちは同性愛者の権利獲得に役に立つと思う。男性同性愛者はこれらの女性と姉妹のように仲がいい。(09)

男性同性愛者は普通の男性より中性的なところがあるかもしれない。だから腐女子たちはゲイと友達になれる。もちろんBLの影響もあると思う。ゲイが結婚できることを期待している。しかし、腐女子は、ゲイに対する認識がまだ足りないと思う。彼女たちだけではなくて、この社会のわれわれに対する認識がまだ足りない。(15)

台湾において、BL読者は、BLのキャラクターがリアルな同性愛者とは違うと知っていても、興味本位で生じた好奇心が、リアルな同性愛者を理解しようとする姿勢に繋がっている(周2010)と指摘される。女性はゲイに対して「新しい男性」というイメージを持っているので、「身を委

ねられる」相手ともなる(石田 2007a)。ゆえに、事例 09 と 15 のように、「姉妹のように仲がいい」、「腐女子はゲイと友達になれる」という意見が出てくる。しかし、一部の対象者は、やはり BL による男性同性愛者に対する誤解に不安を感じている。

かつてある BL にはまっている腐女子と話したことがある。その時、彼女は私がゲイだと知らなかった。彼女はべらべらと BL 漫画について話してくれた。その熱心さに感心したが、偶然に同性愛者パレードの話題になった時、結局彼女は嫌な顔で、パレードは「おかまが集まるイベント」だとコメントした。わざと差別的な発言をしたとは思わないが、やはり BL 漫画をたくさん読んでいても、同性愛者をよく理解しているとはいえない。同性愛者に対する認識が足りない。(10)

2003年に、台湾で初めて同性愛者のパレードが催された¹⁰。毎年のパレードのテーマを見れば、「差別の解消」と「権利の取得」の2種類に分けられる。具体的にいえば、「差別の解消」とは同性愛に対する汚名解消であり、「権利の取得」とは、社会的、法律的に同性婚を行う権利の獲得を指す(周 2010)。前述したように、BL は読者の同性愛者に対する理解と受容の姿勢に繋がりがうるが、対象者 10 の経験によると、「BL 漫画をたくさん読んでいても、同性愛者をよく理解しているとはいえない」という側面もある。したがって、BL にますます人気が集まり、そして同性愛者の権利が注目されてきている今の台湾社会において、同性愛者を正しく認識するためには、適切な教育が必要だと考えられる。

おわりにかえて

本章は、台湾の男性同性愛者による BL に対する態度を探求するために、22名の男性同性愛者を対象者とし、日本の人気 BL 漫画『純情ロマンチカ』の DVD を見せ、BL 中の「愛情」、「性表現」、「関係性」に加え、「BL

10 台湾同志遊行聯盟 (Taiwan LGBT Pride Community) <http://twpride.org/> (最終確認 2013 年 12 月 21 日)

読者の同性愛の権利擁護の立場」に対する意見を集めた。今回の調査結果をまとめると、台湾の男性同性愛者は、BLが非現実的であっても、「愛情」がロマンチックである点や、同性愛者に優しい雰囲気憧れ、支えと励ましになるという意見を持っていることがわかった。「性表現」と「関係性」においては、共に現実離れ、役割が固定化されるという意見が寄せられている。「BL読者の同性愛の権利擁護の立場」について、一部の対象者は、BLは虚構であるが、もし同性愛者に対する受け入れと認識に役立てば、批判する必要がないと主張したが、一部の対象者は、BLを通して腐女子が同性愛を擁護する姿勢と同性愛差別を解消することについてはありがたく感じるが、誤解を招くのが心配で、同性愛者に対する正しい認識を期待している。

台湾の教育部（日本の文部科学省に準ずる政府機関）の政策により、2004年から実施された「性別平等教育法」に「実質的な性別地位の平等の促進」、「性別差別の解消」、「人権の維持」と「平等な性別教育資源と環境の設立」が含まれている。さらに、同性愛差別を解消するために、2006年から学生に同性愛を正しく認識させるための同性愛に関する内容が高校の教科書に載せられてきた。しかし、その内容は依然として、同性愛者の視点からではなく、異性愛中心のイデオロギーによって作られたものである（江佩璇 2007）。2011年に台湾教育部は小学校や中学校の教科書に、同性愛人権と差別解消の内容を導入すべきと指示したが、親の心配と宗教団体からの反対にあった。2012年には「台湾伴侶權益推動連盟」（Taiwan Alliance to Promote Civil Partnership Rights）という婚姻と家庭のシステム改善を推進する組織が、同性婚や共同生活を目指すカップルの伴侶権に関わる民法改正案を作り、2013年にその民法改正案を立法院に提出した。それによって、同性愛人権に関する話題が台湾で大きく論議された。

本章は同性愛者の視点で、BL漫画に対する意見をまとめた。今時点では、台湾の同性愛者はまだ「差別の解消」と「権利の取得」に取り組んでいる段階であるため、「BLは虚構であるが、もし同性愛者に対する受け入れと認識に役に立てば」という意見が聞こえるかもしれない。しかし、「差別の解消」と「権利の取得」に取り組む段階を乗り越えたとき、同性愛者

は依然として BL に映された虚構的な同性愛者像を許容できるだろうか。そうではなくなるかもしれない。

確かに、BL 読者はヘテロ的セクシュアリティを持つ人たちの中で、最も同性愛者に親しみを感じている集団であるといえよう。しかし、BL に投影された同性愛者の姿は決して正しいものではない。BL が本質的なセクシュアル・ライツ擁護へと繋がるかどうかは、今回の調査によると、同性愛者も疑問視している。BL がますます人気を博してきた台湾では、同性愛者に対する差別解消にも、同性愛者の社会参与にも支障を与えないために、ジェンダー／セクシュアリティやメディア・リテラシーに関する適切な教育が期待される。

本章は台湾の同性愛者から見た BL に留めておくが、現在、BL は日本と東アジア諸国の女性だけでなく、もっと遠く離れた異なる文化的、社会的背景を持つ世界中の女性により支持されている（杉本＝パウエンス 2011）。ゆえに、BL をさまざまな側面から考察する価値があると思われる。確かに、BL の起源は漫画だが、現在では小説、アニメなどに広がっている。今後の異なった視点からの BL 論を期待する。

参考文献

- 石田仁「ゲイに共感する女たち」、『ユリイカ 腐女子マンガ大系』第39巻第7号、2007年a、47-55頁
- 石田仁「ほっといてくださいという表明をめぐる——やおい／BLの自律性と表象の横奪」、『ユリイカ BLスタディーズ』第39巻第16号、2007年b、114-123頁
- 伊藤公雄『ジェンダーの社会学』財団法人放送大学教育振興会、2008年
- 上野千鶴子「腐女子とはだれか？——サブカルのジェンダー分析のための覚え書き」、『ユリイカ：腐女子マンガ大系』第39巻第7号、2007年、30-36頁
- 加藤悠二「ゲイ男性と親交を持つヘテロセクシュアル女性へのインタビュー調査」、『ジェンダー&セクシュアリティ』4号、2009年、61-72頁
- 金田淳子「マンガ同人誌——解釈共同体のポリティクス」、佐藤健二・吉見俊哉編『文化の社会学』有斐閣、2007年、163-190頁
- 斎藤環・酒井順子『性愛格差論——萌えとモテの間で』中央論社、2006
- 周典芳「台湾におけるヤオイ読者の男性同性愛に対する意識」、『情報コミュニケーション学研究』8/9号、2010年、53-65頁
- 杉本=パウエンス、ジュシカ「社会批評との関係から見たグローバルな「腐女子」漫画文化——その可能性と限界」『国際マンガ研究3——日韓漫画研究』2011年、135-148頁 http://imrc.jp/images/upload/lecture/data/07_%E6%9D%89%E6%9C%AC%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%82%B7%E3%82%AB.pdf
- 永久保陽子『やおい小説論——女性のためのエロス表現』専修大学出版局、2005
- ながくぼようこ「女性たちの『腐った夢』やおい小説——やおい小説の魅力のその問題性」、『ユリイカ 腐女子マンガ大系』第39巻第7号、青土社、2007年、142-147頁
- 中島梓『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房、1991年
- 夏目房之助『マンガはなぜ面白いのか』日本放送出版協会、1997年
- 野火ノビタ「人間未満の季節——BLと美少女萌えのはざままで」聞き手：金田淳子『ユリイカ 腐女子マンガ大系』第39巻第7号、2007年、84-95頁
- Bauwens., J. “Finding meaning in ‘yama nashi, ochi nashi, imi nashi’: Women and girls creating alternatives to homosexual and heterosexist pornography” 『2005年度若手研究集合報告書』、大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科、2006年、225-234頁
- 藤本由香里『私の居場所はどこにあるの？——少女マンガが映す心のかたち』学陽書房、1998年
- 水間碧『隠喩としての少年愛——女性の少年愛嗜好という現象』創元社、2005年

溝口彰子「それは、誰の、どんな、『リアル』？——ヤオイの言説空間を整理
するところみ」、『イメージ&ジェンダー』4号、2003年、27-55頁
ヤマダトモコ「ボーイズラブとのなかなおり」、『ユリイカ BLスタディーズ』
第39巻第16号、2007年、82-88頁
王貴正『由仇恨犯罪概念論同性戀汚名化形成及影響』台湾國立台北大學犯罪學
研究所修士論文、2007
行政院主計處『社会指標統計年報2009』行政院、2010
江佩璇『中等教育社會科教科書中同性戀議題之探究』。台湾國立嘉義大學國民教
育研究所修士論文、2007
柳俊羽『大學生對同性戀印象影響其同性戀接受度之調查：以國立高雄大學為例』
台湾玄奘大學社會福利學研究所修士論文、2007
黃志湧「漫畫市場流行風」、『動腦』243号、1996、pp. 78-81.
陳其南『家族與社會——台灣和中國社會研究的基礎理念』聯經、1990
陳淑惠『高中生閱讀BL漫畫與同性戀態度之相關研究』台湾國立臺南大學社會教
育學系修士論文、2007
蕭湘文「閱讀同性戀漫畫與性認同之關聯性研究」、『民意研究季刊』212号、
2000、pp. 89-111.
鐘瑞蘋『同性戀漫畫讀者之特性與使用動機之關聯性研究』台湾文化大學新研所
修士論文、1999

周典芳 (Assoc. Prof. CHOU Dienfang, PhD) 1971年、台湾生まれ / 大阪大
学人間科学博士 / 台湾慈济大学コミュニケーション学科准教授、日本
ジェンダー学会、関西社会学会、アメリカ International Association for
Intercultural Communication Studies (IAICS)、台湾 Chinese Communication
Society 会員 / 社会学、ジェンダー学、コミュニケーション学 / 「台湾に
おけるヤオイ読者の男性同性愛に対する意識」『情報コミュニケーション
学研究』No.8/9 (2010)、53-65頁；「台湾におけるヤオイ現象：読者イ
ンタビューから見出したヤオイの理由」『日本ジェンダー研究』no. 12
(2009)、41-55頁。